



日本バプテスト聖書神学校 JAPAN BAPTIST BIBLE COLLEGE

◇ 校長の机から ◇

校長 斉藤 秀文

すると突然、その御使いと一緒におびただしい数の天の軍勢が現れて、神を賛美した。「いと高き所で、栄光が神にあるように。地の上で、平和がみこころにかなう人々にあるように。」
 (ルカ 2 章 13~14 節)



主なる神の御慈愛を感謝し、約束のメシヤの誕生を心から喜び、お祝い申し上げます。

今年もあと僅かとなりました。この一年、世界中が新型コロナウイルス感染症に翻弄され、全ての領域で呻きと嘆きが起こりました。神学校も例外ではありませんでした。様々な緊急対応に追われ、祈らされる日々でした。その度に、諸教会のご理解とご協力を頂き、感謝申し上げます。神学生、教職員たち一同は、主なる神のご配慮の中で、健康が守られ、通常通り対面授業を継続することが出来ました。

そして今、主への感謝とともに救い主誕生を祝うクリスマスを迎えております。

クリスマスと年末を迎えるこの時期、この一年間私は何を一番大切にしてきたのかと考えさ

せられています。

そういう中で、2000年前のイエスさま誕生の時代と状況を思い浮かべました。イエスさまのご誕生は、ローマが共和政からアウグストゥスを初代皇帝とする帝国になった時代でした。帝国とは、単なる大きな国というだけではありません。圧倒的な武力を持って数多くの国々を征服し、自分の支配下に置いて従わせる権力機構のことをいいます。この巨大なローマ帝国には、整然と組織立てられたとてつもなく巨大な帝国軍がありました。このローマ帝国にとってイスラエルなどは、辺境の地、取るに足りない一つの植民地でしかなかったのです。それでも、当時行われたイスラエルの住民登録は、自分たちがローマ皇帝の所有になっている民であることを、否が応でも肌で感じさせられた出来事だったでしょう。

この圧倒的な力を誇る帝国に対して、ユダヤ人の小さな力、努力など無に等しいものです。まさに、巨大な力には、更に巨大な力が必要となります。この原理が現代では、軍核武装競争となっているといえます。これでは、この地における平和（和解）の実現はありません。

ローマとの圧倒的なこの力の差は、ユダヤ人たちのほとんどの人々、ヨセフ、マリヤ、羊飼いのとっても無力感とあきらめを与えたことでしょう。

このアウグストゥスの治世が、すべての人が

ら全てを奪うための治世であるとするならば、神の愛の御支配は、人に仕え、全てを差し出す（ヨハネ3章16節）ことによって成立するものなのです。武力によって押さえつけ、虐げる支配ではないのです。

この圧倒的なローマの力に従わざるを得ない屈辱の中で、羊飼いたちは、神の栄光の光の中で、イエス誕生という喜ばしきおとずれと賛美を聞きます。

心を頑なにして、主イエスをメシヤと信じていない者でも、疑う者であっても、イエスさまが馬小屋で誕生したことは、歴史的事実なのです。

「さて、その地方で、羊飼いたちが野宿をしながら、羊の群れの夜番をしてい」ました。すると、主の栄光が、その回りを照らし出したのです。そこで羊飼いは、「非常に恐れた」。確かに、わたしたちも恐れています。私たちは、自分が不利益を受けると思われる、あらゆることを恐れます。時には、隣人の目、その噂、何か分からない運命、あるいは致命的な疾病を患うこと、大きな事故に遭うことを恐れ、死を恐れ、貧しくなることを恐れます。そして、今は、新型コロナに羅漢することを恐れます。今日の感染拡大を覚えたとき、一体、誰が恐れずに居られるでしょうか。これは、信仰が有るか無いかの信仰の問題ではなく、それに対してどのような対策するかの問題なのです。このような災いは、恐れるものではなく、適切な対応が検討されるべき事柄です。

しかし今私たちに蔓延しているのは、新型コロナ感染症ではなく、この病への恐れです。この恐れは、分断によって引き起こされる隣人への不信、そして孤立と孤独、絶望へと向かわせ、死に至らせます。

羊飼いたちのうちには、御使いが近づき、主の栄光が回りを照らしたので、大きな恐れが起こったのです。それは、大きく、真に恐れなければならない恐れです。何故ならば、神の栄光が回りを照らしたのですから。私たちが本当に恐れなければならないのは、主の栄光が羊飼いを照らしたとき**非常に恐れた**ように、主だけを恐れる恐れです。

よくよく振り返ってみますと、私は、昨年の校長代行の時より、失敗すること、人に非難されること、人の不平不満を聞くことを恐れて居たのではないかと、思わされたのです。そうではなくて、私が神学校の校長として、信仰によって戦う相手は、自分の中にある自己保身と、面子、自己弁護という自己本位の罪との戦いだったのです。私が心を用いなければならない向かうべき方向を誤ってはならないのです。真の神だけを恐れる、恐れが自分の心の中心にあるかどうか、大切だったのです。私たちは、主を恐れます。しかしその時、「**恐れることはありません**」との御使いのことばを慰めとして頂いているのです。その慈しみあるおことばを下さった神を信頼するという、その方向性を誤ってはならないのです。

もう一度言います、果たして、私たちの中に、この大きな恐れかあるでしょうか。私たちが本当に恐れるのは、コロナ感染（無論それ以外の全ての地に属すること）ではなく、真の神なのです。御使いは、「**地の上で、平和**」が、イエスさまを自分の主として神を恐れて生きる場所の人、つまり「**みこころにかなう人々に**」あると告げられました。神の栄光を顕す光は、今、羊飼いを照らしているのです。そして圧倒的な見えない不安にうめいている私たちをも照らしているのです。



-新入生の証-

小野克神学生(港北BBC)



私は高校一年生の時にイエス様によって救われました。

私の家はクリスチャンホームではありませんでしたので、初めて聖書を読んだ

のは、私が中学生の時でした。

高校生になると、私はインターネットやラジオなどで、聖書のメッセージが配信されているのを見つけ、それから毎日、学校の行き帰りの時間や、家に帰ってからも、それらのメッセージを聞きました。

メッセージを聞く生活を1年ほど続けたある日、2013年の1月14日のことでした。神様はこの日に、信仰の確信をお与えくださいました。

自分の救い主はイエス・キリストであるという確信を頂いた私は、その日のうちに、初めて頂いたギデオン協会の、新約聖書の巻末に、付録でついている信仰告白の欄に、自分の名前とその日の日付を記入いたしました。

この信仰告白の欄には、次のように書かれています。

『私は神の御前に罪人であり、主イエス・キリストは私の罪のために十字架にかかって死んでくださったこと、及び私を義とせんがために復活してくださったことを信じ、キリストを私の個人的な救い主として受け入れることを、いまここに告白いたします。』

その後、神様は私を港北聖書教会に導いてくださいました。そしてこの港北聖書教会で、自分が神の御前に罪人であること、主イエス・キ

リストが、私の罪のために十字架にかかって死んでくださったこと、そして私を義としてくださるために復活してくださったこととを、確かに確認し、2016年の3月27日に、公に信仰告白をしてバプテスマを受けました。

大学生になってから1年ほど経った頃でした。私は、授業が非常な苦痛に感じられるようになってしまっていました。弁護士という職業に憧れを持ち、第一志望の中央大学の法学部に入学いたしましたが、しかしどれほど努力をし、自分を変えようとしても、まったく学びが身につきませんでした。

私は自分自身に絶望しました。そのときは全くの真っ暗闇で、どうすれば良いのかも分からず、自分がどの道に進めば良いのかも、分からなくなってしまいました。

しかし、このような状況の中にあっても、神様だけは私を見捨てずに、私と共にいてくださいました。

そしてこのような苦しい時期を通し、神様は高慢になっていた私を砕いてくださり、そして本当に、人には福音が必要なのだ、という強い思いをお与えくださいました。

私が神様から召されているということを確認できたのは、マタイの福音書28章20節の御言葉からです。

[マタイの福音書 28:20]

「わたしがあなたがたに命じておいた、すべてのことを守るように教えなさい。見よ。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたとともにいます。」

この召しに相応しく生涯をまっとうし、主に喜んでいただけるために、何よりも祈りを大切に、日々歩んでゆきたいと思います。

-オープンカレッジ 講義要旨-

コロナ禍においても「なぜ世界宣教なのか」～キリストの独自性と世界性～

マイケル・バーゲット先生
(アガペ BBC)



まず11月のオープンカレッジで神学生とオンラインの方々と共に上記の重要な課題を学ぶときが与えられたことを心から感謝いたします。ここで二日間に渡り学んだ事柄を集約して紹介したいと思います。

その前にコロナ禍中にも関わらず、世界宣教はなぜ何よりも重要であるのかについて短く、語らせてください。ニュースでは新型コロナのワクチンが開発されたと報道されています。感謝なことですが、「罪のワクチン」が何よりも必要であるのです。人類の最大の問題はコロナ禍ではありません。罪の問題です。

天の神様が人類の最大の問題である罪から救うために御子なるイエス・キリストをお遣わしてくださいました。イエス・キリストの十字架上の死、また死に勝利しよみがえった御働きによって滅びゆく罪人への救いの道を備えてくださいました。世界宣教とはその福音（良い訪れ、グッドニュース）を滅びゆく世界中の人々に宣べ伝えることです。私たちはキリストこそが罪人を救い得ることのできる唯一なる誠の救い主であると宣べ伝えるのべきです。

確かにコロナ禍は大変です。それを引き止めることのできるワクチンを歓迎します。しかしながら、それよりはるかに大変な禍があります。罪の禍です。そしてその罪の禍からの救いもあるのです。これこそが「なぜ世界宣教なのか」の主ご自身からの答えです。

さて、今回の学びを1) 世界宣教を聖書から見る、2) 世界宣教の救い主、3) 世界宣教の現状、4) 非聖書的な世界宣教、の四つに分けてお伝えしたいと思います。

今回の学びの7コマ（半分）ほどはこの1番目の「世界宣教を聖書から見る」でした。そしてまず「宣教」や「宣教師」の語源と定義について考えてみました。「宣教」や「宣教師」をよく活用しますが、その語源は知っていますか。英語の「ミッション」とか「ミシャネーリ」の語源はラテン語です。元々ラテン語訳聖書の「遣わす」を語源としています。「あなたがわたしを世に遣わされたように、わたしも彼らを世に遣わしました。」(ヨハネ17:18)にある「遣わされたように」と「遣わしました」のラテン語が「ミッション」とか「ミシャネーリ」の語源となっています。残念ながら、日本語（漢字）の「宣教」や「宣教師」はこの「遣わす」の意味を含まれていません。ギリシャ語ではこれは「アパステロー」です。「アパステロー」は旧約聖書のギリシャ語訳（70人訳）にも多く用いられていました。世界宣教は主の御技であり、私たちが主によって遣わされていること、主の意とするために遣わされていることを忘れてはならないのでこのことを特に強調しました。

「世界宣教を聖書から見る」の中では「宣教」と「伝道」（日本語と英語）の違い、聖書全体に見る世界宣教の主のご計画（神から始まり、神に終わる）、世界宣教の聖書的メッセージ、その聖書的な原則、その聖書的な動機や目標などを考えてみました。「なぜ世界宣教なのか」と一言でお答えすると主の御心であるかと

も言えます。世界宣教は聖書のいたるところから主の御心とするものと



して滲み出ております。

2番目の「世界宣教の救い主」について2コマを当てました。この中ではサブタイトルの「キリストの独自性と世界性」を特に注目しました。この表現はローザンヌ誓約の第3項から来ていますので、その内容をベースにして分析を試みました。もちろん、ローザンヌ宣教運動は超教派運動ですから、注意すべき点も確認しながら学びを進めました。「この方(キリスト)以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。」(使徒4:12)に記されているように、イエス・キリスト以外には救い主はおられないことを改めて確認するのがこの2コマの狙いでした。

3番目の「世界宣教の現状」には1コマを当てました。ここでは日本をはじめとする世界宣教の現状がいかに悲惨であり、いかに働き人が必要とするのかを確認しました。この1コマでは様々な資料を元に世界宣教の現状をみました。「アンリーチの人々」、「10/40の窓」、「ジョシュア・プロジェクト」(下記のQRコードでご覧ください)などを紹介し、国内外の宣教の緊急性を訴えました。それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやされた。また、群衆を見て、羊飼いのない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかわいそうに思われた。そのとき、弟子たちに言われた。「収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主は、収穫のために働き手を送ってくださるように祈りなさい。」(マタイ9:35~38)にあるように私たちも主の目をもって世界を見、主に祈り、世界宣教になお励むべきことを考えるときとしました。



4番目の「非聖書的な世界宣教」において「ユダヤ主義者」と「グノーシス主義者」の新約時代の誤った二つの教えをまず見ました。それから宣教地によっては盛んになっている「繁栄の神学」の誤り、またそれと似ている「イエスを信じてみるとこの問題が解決されますよ」というの危険についても考えてみました。「しかし、イスラエルの中には、にせ預言者も出ました。同じように、あなたがたの中にも、にせ教師が現れるようになります。彼らは、滅びをもたらす異端をひそかに持ち込み、自分たちを買い取ってくださった主を否定するようなことさえして、自分たちの身にすみやかな滅びを招いています。」(2ペテロ2:1)に記されているこの警告通り、今日も多く偽教師がおられますので、そのことを覚えながら世界宣教に励み続けなければなりません。

主イエス様の再臨の日がいよいよ近づいておられるように思う今日この頃です。困難な時代です。だからこそ最も必要とされているのは主の御心とする世界宣教に励み続ける忠実な働き人です。最後まで、主に用いられ、祝福されるよう、共に祈り合い、励まし合いましょう。

「これらのことをあかしする方がこう言われる。『しかり。わたしはすぐに来る。』アーメン。主イエスよ、来てください。主イエスの恵みがすべての者とともにあるように。アーメン。」(黙示録22:20~21)。

-秋期講座 講義要旨-

「世界宣教の一つとしての日本宣教 ～来日宣教師の視点から～」

ジェームズ・スミス先生
(若葉 BBC)



ある人は私に、日本は宣教師の墓場だと言いました。つまり、ここの伝道は難しいので多くの宣教師の働きは、日本で死んだという意味です。そうであっても、日本の伝道や開拓は不可能ではありません。何より、福音は世界中のすべての人のためにあるのです！聖書はこう教えます。「神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世（世界中の人々）を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。」

2006年12月に私と家族が幕張に到着した時、日常生活での多くの変化に直面しました。私たちが直面したことの中には、次の二つものがありました。第一に、日本語は欧米人にとって特に困難です。例えば、英語は、一種類26の文字があるのみです。何千もの文字と発音を学ぶなど、当初は想像し難いことでした。

第二に、宗教について考えることは、日本とアメリカでは大きく異なります。日本人にとって複数の宗教体系を信じ受け入れることには問題がありませんが、アメリカ人にとっては、一つの信仰体系を持つことの方が筋が通ります。私たちは多くの文化的な困難に、これまでも、また今も遭いますが、日本への宣教師としてこれらの困難を知り、どのように克服するか考え、順応することは日本人の心に近づき、長期間日本に滞在するのに重要なことです。

日本に滞在するのに重要な一つのは、交わりです。交わりは最終的に、福音を宣べ伝え

る働きには互いを助けるためです。(ガラテヤ 2:1-10)。パウロはお互いの交わりを示すために「交わりの右手」を差し出しました。日本では、「交わりの右側のお辞儀」ができるかもしれません。

宣教師が交わり、直接共に働くのは聖書的でありながら、複数の出所によると宣教師が宣教地を離れる主な理由の一つは、他の宣教師との論争です。争いの一つの共通した理由は、期待が叶わないことです。他の理由には、「争いの方程式」があります。つまり、罪人が(+)他の罪人と共に働き(+)他の罪人に福音を伝えようとする(=)たくさんの罪人が混ざり、多くの争いが起こり得るということです。もちろん他にも多くの理由があることでしょう。争いに対処する基本原則と具体的な提案は次の通りです。まず、宣教師は共に働く際、現実的であることです。第二に、宣教師は互いの期待について広く話し合うことです。第三に、争いが起きたら、キリストのような態度を持つことが望ましいでしょう(ピリピ 2:1-8)。つまり、宣教師は争いが大変困難になってもへりくだるよう努めることです。第四に、最初から最後まで、宣教師は絶えず祈ることです。



他の宣教師と交わることに加えて、私にとって国内の牧師と交わることもまた、大切なことです。初めて来日した際、日本人の牧師との交わりの難しさもあります。当初の難しさは、言葉の壁でした。また日本人は一般的にアメリカ人よりもずっと形式的です。私もそれに順応し形式的になる必要がありました。また、日本人の牧師から多くのことを学んできました。私に忍耐深くしてくださることで、私自身も忍耐を

学びました。また、受け容れることを学びました。

宣教師の重要な働きの一つが、教会を開拓することです。聖書は、互いの近しさと献身を示す様々なことばで教会を説明しています。教会は家族で（ガラテヤ 6:10）、家で（1テモテ 3:15）、神殿で（エペソ 2:19-22）、からだです（1コリント 12:25-27）。私たちは全体を組み立てる別個な各部分であり、神の栄光のために共に労しています。



宣教師のもう一つの大切な働きは、伝道、つまり、イエス・キリストの福音を伝えることです。様々な聖書箇所がイエス・キリストの福音を伝えることについて私の考えを導いてくれます。まず、マタイ 22:37-40 は、「そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』…律法全体と預言者とが、この二つの戒めにかかっているのです。』」隣人に福音を伝えることは、隣人を愛する最善の方法だと思います。私の伝道にたいする考えを導く第二の聖書箇所に、エペソ 4:15 があります。「むしろ、愛をもって真理を語り、…」神の御言葉の真理を伝えることと、教える相手の人を誠実に愛することのバランスを取ること、それが聖書の原則です。第三の聖書箇所は、1コリント 9:19-22 です。「…それは、何とかして、幾人かでも救うためです。」パウロは福音を効果的に伝え、キリストを自分の救い主として相手の方が信頼するように説得するために、人に仕え人を愛しました。

宣教師の大切な働きには、弟子訓練、つまりイエス様の弟子を作ることもあります。イエス様の弟子たちは、礼拝者で（ヨハネ 4:23-24）、しもべで（ヨハネ 13:8-9）、目撃者でした（ヨハネ 20:21）。弟子訓練について私の考えを導いてくれる御言葉は、二つあります。第一に、マタイ 28:19-20 です。「それゆえ、あなたがたは行って、あらゆる国の人々を弟子となさい。…」宣教師や牧師に対し、イエス・キリストの弟子をつくるようにという命令は、これ以上明確にならないでしょう。弟子訓練について私の考えを導いてくれる第二の御言葉は、マルコ 8:34 です。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、…」真の弟子たる神髄は、主人のために自分のいのちを捨てることです。これこそ、イエス・キリストのすべての弟子にとって究極の目標です。

結論として、私は来日して以来、主について、主に従うことについて、また宣教師として主に仕えることについて更に多くのことを教えられました。主が日本で経験させてくださったことのすべてを主に感謝します。主がお許しになる限り、皆様と共に主にお仕えするのを楽しみにしています。

オープンカレッジは11月3～4日、秋期講座は5～6日に、神学校で行われました。オンラインでの参加者は18名でした。秋期講座では、鈴木しのぶ先生(若葉BBC)から海外宣教に向けてのお証もお聞きました。



..集中講義に参加して..

高木正之（滝山 BBC 教会員）

「世界宣教は私たちのことではない。」

世界宣教の聖書的動機と目的の講義で、非聖書の動機の第一が「私たちの影響力を伸ばすことではない」でした。バーゲット先生は言い方は誤解を招くかもしれないと慎重に話してくださいました。それが衝撃的でした。「世界宣教は私たちのことではない。JBBF の名前はいつでもいいんです。JBBF が生まれる前にも主は世界宣教の働き人を遣わしておられましたし、そうは願いませんが、もし廃れても主はその後もちゃんとお働きを継続されます。大事なことは私たちは主の働き人として謙遜に、主よどうか私たちを用いてくださいと言う心をいつも養うことです。」注意しないと私たちは教会を大きくしたい、グループの影響力をさらに広げたいという思いを言葉にはしないがなんとなく感じる時があるからです。これが単純に主の働きとしてなら問題ないが、私の教会や私たちのグループのために



すり替わってしまう危険がある。もし私たちが宣教の成果の右肩上がりに喜びを感じるだけなら動機が違ってお

り主はそれを祝福しない。働きの途中で動機が変わっていくことがあることを教えられました。

この問題に対して、「あの方は盛んになり、私は衰えなければならない。」ヨハネ3：30と言うバプテスマのヨハネの謙遜な心を持つことを勧めました。黙示録の7つの教会への手紙から主が一番としていることは教会がいつまで残るかではなく、その教会が本当に主の御体として良い働きをするかである。教会が廃れても主の御旨のことがある。この講義で私自身の世界宣教の動機が深く探られるとともに、主ご自身の世界宣教の御旨と私の思いが一つになれるように心の動機を識別することを教えられました。

上原 光博（佐倉 BBC 教会員）

主の御名を賛美します。今回の講義を通して示された事は勇気を持って異文化とコミュニケーションを取りキリスト教を広めていきたいということでした。講義の中で私が分かったことは、アメリカから日本へ来られたスミス先生が日本と言う異国の地で宣教活動する事がいかに難しいかということでした。それは日本語の難しさや、また日本が全てにおいて儀式のあるフォーマリズムな文化であるからだということでした。また本音と建前があるともおっしゃっていました。



今回の講義の最後にスミス先生から、「もし海外の人が教会に来た時どうしたら良いか」という課題が出ましたが、伝道という点から考えても私のいる佐倉教会はまだ不十分な所があるのではと感じました。これは課題の後の発表会でも上がっていたことですが、教会に来る外国人達の皆さんは生活に苦労している人が多いようです。こういった人達の背景に隠れている問題をも汲み取ってあげられるような教会でありたいと、またそういったニーズに対応できる賜物を持った人材が教会の中から育ていって欲しいとも思いました。

最後に講師をしてくださったマイケル・バーゲット先生、ジェームズ・スミス先生、オンライン講義を支えてくださった神学校の齋藤秀文校長先生をはじめ諸先生方、神学生の皆様に感謝致します。

藤田 夏穂（神学校4年生）

4日間連続で宣教学の学びができたことを幸いに思い、感謝いたします。バーゲット先生からは、聖書から宣教について細かく教えていただき、スミス先生からは実際のお働きの経験から教えていただきました。

4日間の講義を通して、今も私の内に残り、考えさせられているのは、「福音の中にどれほど浸って生きているのか」ということです。

「十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであっても、救われる私たちには神の力です。」
Iコリント 1:18

この御言葉の意味の深さを私自身が浅く受け止めていたことに気づかされました。私が救いを与っているのは福音の故であり、イエス様の十字架による贖いのみわざがあったからです。それにも関わらず、どうかして福音を、十字架を相手が信じられるように伝えるかばかりを意識していた自分がいました。しかし神様はあえて十字架をお選びになりました。そのように



して、ただ主のご栄光だけが現わされるようにされたのです。福音の中に生き、主のご栄光を知るようにされた私が、このことを伝える主のお働きに参加させていただく特権に与らせていただいていること、また主が遣わしてくださることを、主に感謝します。この働きには苦労や時に悲しみがありますが、遣わしてくださる主が守りと御力を与えてくださるために、私の力や知恵で宣べ伝えなくて良いのだと励まされました。私がすることは、主を愛し、隣人を愛することなのだと言われた学びの時となりました。

(集中講義の CD・DVD の購入をご希望の方は、神学校までお問い合わせください。)

上田晃先生

感謝状授与式のご報告

疋田健次先生（岡崎 BBC）

去る9月7日(月)、神学校の教職を半世紀にわたって務められた上田晃先生と、先生の働きを影で支えて来られた欣子先生



先生に対する感謝状授与式が岡崎教会にて行われました。本来であれば神学校の卒業式や入学式のなかで行うべき事柄ですが、未だ収束する気配の見えないコロナ禍にあって、止むを得ずこのようなかたちを取るようになりました。

当日は神学校管理委員会副委員長の上田廣行先生が司式され、感謝状と花束の授与が行われました。

式のなかで晃先生の証しがあり、神の御救いに与ると共に、『よしや我、かれが我の来るまで留るを欲すとも、汝になにの関係あらんや、汝は我に従へ』(ヨハネ 21 章 22 節、文語訳)の御言葉によって献身の思いが与えられたこと。神学校に入学する前から農村伝道に勤しみ、主の働きに仕えて来られたことを伺いました。教師としての働きは終えられますが、主の御許しのある限り、伝道者としての道を歩んでいきたいという言葉に、力強い励ましをいただきました。



伝道実習の証

伝道実習は10月13日(火)～16日(金)に、次の6教会で実施されました。

浦和聖書バプテスト教会、滝山聖書バプテスト教会、千葉バイブルバプテスト教会、平塚聖書バプテスト教会、横浜聖書バプテスト教会、若葉聖書バプテスト教会(五十音順)。以下、この順に実習の証を掲載します。

張替 愛 (3年生)

救い主の御名を心から賛美致します。

いつも神学生のためにお祈りくださり、主にある励ましと支えをくださる諸教会の先生方、愛兄弟方に心より感謝申し上げます。

私は今回、浦和聖書バプテスト教会の川島実成牧師ご夫妻の下で実習させていただくという恵みに与りました。コロナ禍にも関わらず、この者たちを受け入れてくださった浦和教会の皆様にも心から感謝申し上げます。一年ぶりに奉仕教会以外の教会で、しかも今後共にお仕えすることになる主人と二人で実習させていただくことができ、本当に多くのことを教えられた実習期間でした。主が与えてくださった恵みを振り返りつつ、その一部をお証しさせていただきます。

第一に、先生ご夫妻との深い関わりをいただけたことです。物理的な距離にはご配慮くださりながらも、深く濃い学びと交わりのときをいただくことができました。先生ご夫妻がこれまで歩いて来られた召しの道における喜びや苦しみ、中にはご自身の失敗や示された罪も踏まえつつ、一神学生に過ぎないこの者に教えてくださいました。先生ご夫妻は「反面教師として」とおっしゃいましたが、その謙遜さと誠実さに大変教えられ、自分を捨てて召しに従うということがどういうことなのかを、また主に砕かれた伝道師としての模範を示していただきました(Iコリント1:26-31)。

第二に、婦人集会での説教奉仕が与えられたことです。説教準備の中で、「説教」を修学したばかりのこの者にとっては、これまでになかった葛藤、苦しみを経験することとなりました。しかし、そのことを通して、自分自身がいかに主とのみことばへの信頼が無い者であるか、

主以外のものを恐れている者であるのかに気付かされ、主の御前に悔い改める機会とされました。その後は、みことばに隠されている宝を探し出す恵みに与り、その豊かさ、確かさを味わわせていただきました。このように変えてくださったことの感動と感謝は、これから先の説教奉仕に与る際に立ち返るべき原点になると思わされています。婦人集会はリモート形式でしたが、説教後には参加された姉妹方から分かち合いのときをいただくことができ、そのことを通しても、ただただみことばに力があること、またそのようなみことばをお取り次ぎするという働きの恵みと責任の大きさ、そしてお一人おひとりの信仰に教えられ、主の御名を崇めるときとされました。

これから先、主が遣わしてくださる地がどのようなところなのかは分かりませんが、すべてをご存じの主が、今回の実習のあらゆる事柄を通して今後の働きに備えさせてくださったことを覚え、心から感謝申し上げます。



堀口 和基 (4年)

2020年3月、コロナウイルスの影響により神学校も休校を余儀なくされました。それに伴って、毎年4月に行われている後期の伝道実習も形式を変更し、各奉仕教会で実習を行ないました。それから半年以上が経過しましたが、未だ状況は抑えられておらず、日々拡大しています。そのような中で今回は少人数に分かれるという形をとりましたが、学生全員がそれぞれの場所で伝道実習を行えたことを主に感謝します。

私は一年生の小野兄と共に、滝山聖書バプテスト教会での実習に導かれました。五日間の実習を通して最も教えられたことは、『御言葉による成長と御言葉の実践』というビジョンを先生方だけでなく、教会員の方も持っているということです。実際に、少人数で行われた聖書の学び会に参加させていただき、このビジョンが確かに共有されていることがわかりました。また、学び会とは別の時間に少人数グループでの交わりの時間が与えられた際、一人の教会員の方から「御言葉への飢え渇きがあるので教会に来ています」というお話を伺い、説教者が御言葉の真理を正しく語ることの大切さを教えられました。

また今回の実習では、先生方との学び会の時が多く与えられました。高木先生との学び会では特に青年伝道についての学びをいただきました。滝山教会ではコロナウイルスの拡大によって一時は教会での集まりを行うことができないという期間がありましたが、オンラインという方法を通して、この時から新たに聖書の学び会を始める方が与え

られたこと、そしてこの学び会から救われる方が与えられたことを伺うことができ、宣教のはたらきが継続して行われていることを教えられました。

実習の最終日には、テイ先生との学び会の時が与えられました。聖書の学びから始まり、滝山教会のこれまでの歩みやコロナウイルス禍での教会の取り組み、将来のことなどを中心に時間が足りなくなるほどの学び会となり、これからははたらきのために必要な多くのことを教えていただきました。

五日間を通して教会員の方とオンラインや直接お会いすることを通して、交わりの時が与えられたことも感謝でした。

今回、このような状況の中で私たちを受け入れてくださり、様々な配慮をしてくださったテイ先生、高木先生、デボア先生、大木先生。そして祈りによって支えてくださった滝山教会の皆様感謝します。

そして、何よりもこの実習の時を与えてくださった主に感謝します。



石川 高嶺 (2年)

「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」

ヨブ記1：21

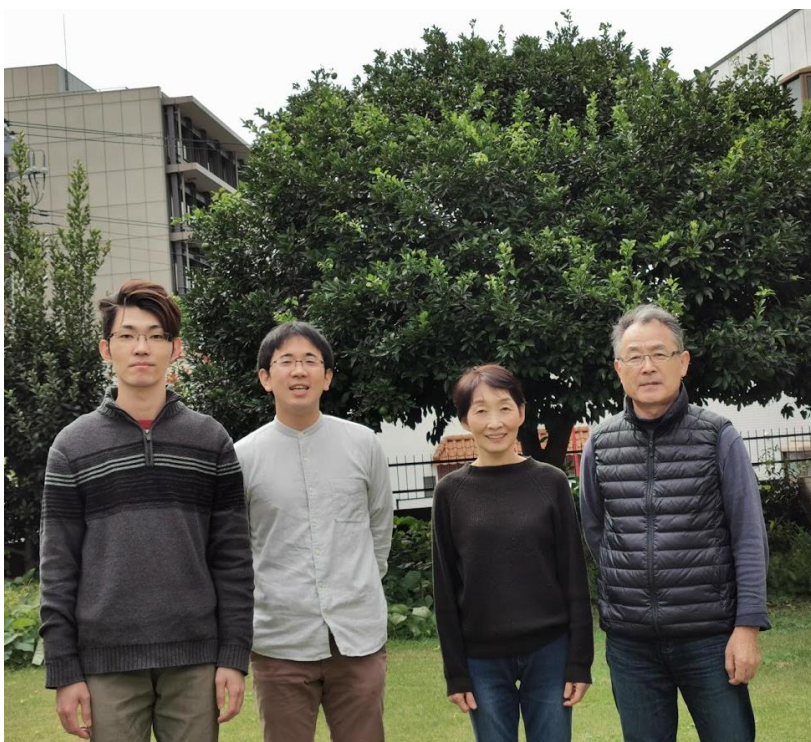
はじめにこの場を借りて、2年半もの間私の病気の癒やしの為にお祈り下さった、フェロシップの先生方を始め、兄姉に心から感謝申し上げます。立ち上がることもできず、生きた死人のような状態から少しずつ動けるようになり、丁度一年前の病院変更と投薬治療の効果によって劇的に改善しました。まだ鬱になることも、発達障害によって多少の記憶障害や不注意による負傷もありますが、薬が効いている間は最低限の生活が送れるようになりました。

召しの確信を頂き神学校に入学して一年も経たぬ内に突然原因不明の病気になり（倒れる1時間前に伝道者の書3章1～8節が与えられていました）、後に発達障害による重度の鬱病と診断されましたが、「神様どうして」という思いが、これが最善の道だとはわかっていても拭いきれず、神様との関係も自然と遠ざかって行きました。しかしコロナによって始まったネット配信の奉仕を仕方ない気持ちでやる中で「準備するように」と示され、それでも背を向けていた私が何気なくFURY(激しい怒り)という映画を見た時に、イザヤ書6章8節『私は主が言われる声を聞いた。「だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか。」私は言った。「ここに私がおります。私を遣わしてください。』』という御言葉を通して神学校に戻るよう示されたのだという確信を頂きました。

神学校再開において、様々なこと

が不思議と整えられ、11時からリモートでの授業を滞りなく受講しています。最初のヨブ記の御言葉は実習が終わった次の日に与えられたものです。これを見た時に「主は与え」が最初に宣言されていることに気付きました。本来は30年の人生で大きな病気もせずに歩めたことを感謝しなければならないのだということ。仮に健康が取られたとしても「主の御名はほむべきかな。」と信仰に立ち続けることが必要であることも。

実習後、病気になった年の目標聖句、箴言3章5～10節を見ると続きがある事に気付きました。11～12節「わが子よ、主の懲らしめを拒むな。その叱責を嫌うな。父がいとしい子を叱るように、主は愛するものを叱る。」主はもう怒るなど言われている。それでも私の心は頑なで祈りができませんでした。ところが、1ヶ月前から示されて読み始めたヨブ記22章21～30節の「さあ、あなたは神と和らぎ、平安を得よ。もし全能者に立ち返るなら、あなたは再び立ち直る。」という御言葉により、再び神様との和解に至らせて下さいました。全ての主の導きに心から感謝致します。



堺希望（4年）

今回の実習はコロナ禍で行われた、奉仕教会以外での初の実習でした。通常であれば全員一か所で実習をさせていただくのですが、今回は世情により少人数で数教会へ分散した形で行われることとなりました。

私は単独で、平塚聖書バプテスト教会にて実習をさせていただきました。

この実習は費用の事前試算やスケジュールの作成、その他実習に必要なやり取りを各教会ごとで行ないます。その中で私は説教の奉仕を依頼されていました。実習が始まる前に実習教会の牧師先生に確認していただき、準備を整えてから臨むことが通常です。しかし、私はそれを完成させることが出来ないまま実習を迎えてしまいました。間に合わなかった説教の準備を実習中に続ける運びとなり、事前に打ち合わせていたスケジュールの半分を説教準備へと変更しなければなりません。

それは実習教会と牧師に大変なご迷惑をおかけすることでした。実習前半の二日間をほとんど誰とも顔を合わせず黙々と説教準備に向かうそんな私に対して、牧師の三谷先生はただの一度も嫌な顔をされたり、急かしたり、責めたりせず、仕えに来ている神学生の私に逆に仕え続けてくださいました。その黙々とした姿勢はむしろ、先生がどれほど説教に懸けているのか、そして私を信頼してくださっているのかを雄弁に語っていました。その結果私は多くの祈りに支えられて、説教を語らせていただくことになりました。本来望ましくない形でしたが、これ以上ない程にみことばの取次ぎをする重さを教えて頂いた一幕でした。

また、奉仕の内容や時間配分を牧師から言われて設定するのではなく、休息もペース配分も

すべて自分で設定する奉仕をさせていただきました。そのようなことは神学生になってから今まで経験したこともなかったことです。自らの性分もあり、どうなることやらと心配しましたが、不思議なことに今まで実施されてきたどのような実習での奉仕よりも楽に、また効率的に、力を抜いて終えることができました。当たり前のことかもしれませんが、自ら進んで捧げるところに自由と力があるのです。その大事な基礎の部分、教えて頂くひと時でした。

「何ができたか」、と問われれば「ほとんどない。むしろ、していただいた事ばかり」としか答えられません。今回の実習は「何ができたか」以上に、「何のために生きているか」を問われた実習のように思います。

すべてを用意してくださった主をあがめます。

「主が私たちのために死んでくださったのは、私たちが、目を覚ましていても眠っていても、主とともに生きようになるためです。」

I テサロニケ 5 : 10



井垣勇基（4年）

「自分の背きを隠す者は成功しない。告白して捨てる者はあわれみを受ける。幸いなことよ、いつも恐れる心を持つ人は。しかし、心を頑なにする者はわざわいに陥る。」

箴言 28:13-14

主は今回の伝道実習で、横浜聖書バプテスト教会に導いてくださり、長江先生ご夫妻を始め、先生方、兄弟姉妹を通して、多くの訓練、学び、奉仕、交わりの機会を与えてくださいました。

実習が始まる前、上記のお言葉に導かれて、悔い改めの思いを新たにし、主の御前に罪を悔い改め告白し、導きに従って兄弟の前でもそれを告白し、主のあわれみをお分かちしました。それによって自分は一体どのようなところから主に救って頂いて、今何のために生かされているのか、またこれからどのような道を歩んでいくべきなのかを再確認して、実習の日を迎えることができました。

実習中、祈祷会で救いと献身の証しをさせて頂きました。私はそこで、これらのことに合わせて、罪の悔い改めと、宣教の証しを致しました。すると、ある先生が「教会の中高生たちにもぜひ聞かせたいので、証しのビデオを作って頂けませんか」とおっしゃってください、実習の後半は予定を変更して、証しのビデオを二本、作成しました。主に用いて頂くのにあまりにもふさわしくない私を、主がこのような形で用いてくださることに感動を覚えました。そして、

罪を悔い改める者に対する主のあわれみの深さを教えられました。

また、今回の実習での一番の祝福は、三回に渡るの長江先生との面談でした。その中でも、自分の罪を告白する機会を頂きました。見損なわれることを覚悟していました。しかし、先生ご自身も様々なお証しとともに、ご自分の罪を打ち明け、弱さを分かち合い、励ましてくださいました。

最後に先生はおっしゃってくださいました。「働きが途中で止められるのは、本来あるべきことではありません。私もこの道をまだ走っている者ですが、兄弟にも、この道を最後まで走り、全うして頂きたいのです。死に至るまで、忠実に仕え尽くしてください。」

常に主を恐れて、みことばに養われ続けることで、召しを全うすることができるように、主のあわれみを願うばかりです。



澤みのり（4年）

「あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに踊っています。」 第一ペテロ1章8節

素晴らしい主の御名を賛美申し上げます。

この度私は、同じ四年生の藤田夏穂姉と一緒に若葉聖書バプテスト教会での実習に導かれました。そしてジェームズ・スミス先生とエイミー・スミス先生、鈴木しのぶ先生、教会の兄弟姉妹方と多くの交わりを頂きました。コロナ禍にあって交わりに様々な制限がなされるなか、親しいお交わりを頂き、多くのことを教えてくださいました。私たちクリスチャンは主を中心とした交わりの中で教えられ励まされ、慰めを頂くのだと改めて実感させられました。

何よりも神様が私の期待していた以上のものを与えてくださり、教えてくださいました。それは自分がどれだけ喜びと愛に欠けていた者だったかということです。実習中スミス先生が毎朝デボーションを導いてくださり、初日の朝に救いの喜びについて教えてくださいました。また先生方と顔を合わせた最初の交わりの時間も互いの救いを証しし、共に喜びをもってはじまりました。兄弟姉妹方との交わりも救いの喜びを分かち合うことではじまりました。そこから私たちの交わりの土台は救いの喜びにあることを教えられると同時に、救いの喜

びを再確認させられる幸いなひと時をいただきました。神様がまず私たちが喜びをもつことをみこころとしてくださっていて、願っておられることを知りました。私たちが主を喜ぶことは大きな力となり、愛する兄弟姉妹方と共に喜ぶことは大きな励ましとなりました。

また、若葉教会の皆様が本当に大きな愛をもって私たちを受け入れて下さったことを覚えます。そして皆様がその愛を私にわかるように示してください、愛をあらわしてくださいました。神様が私たちを愛して下さっているから互いに愛し合う事、そしてイエス様は私たちの罪のために十字架に架かれて愛を公に示してくださいましたので互いに愛を示し合うことを教えて頂きました。今回私が受けた大きな愛を、今度は私が神様の御前においてどのようにお返ししていくかという大きなチャレンジを頂く時ともなりました。

コロナ禍のなかにながら、このような実習の機会を備え与えて下さった神様に感謝いたします。こんな時だからこそ神様の導きと守りを覚えると同時に、背後に本当に沢山の祈りがささげられていることを覚えて心から感謝するひとときとなりました。主と主にある御教会の更なる祝福のために祈るばかりです。





～ 編集後記 ～

2020年度、神学校は4年生6名、3年生1名、2年生2名、1年生1名の合計10名の学生でスタートしました。9月に入学式が行われ、10月には伝道実習、11月には1週間の集中講義が行われました。今号の新入生の証、講義や伝道実習の証を通して、学校・学生の近況の一端に触れていただければ幸いです。

コロナ対策については、授業中45分に一度は換気をするなど、引き続き気を配って対応しています。そういう中で、しばらく控えていたチャペルでの讃美が、1節だけですが再開できたことは感謝です。

軽井沢は冷え込みの厳しい季節を迎えます。続けて学生の学びと健康、訓練のために、お祈りください。

(編集担当：加治佐清也)



今後の予定

2020年12月19日(土)～
2021年1月11日(月)
クリスマス休暇

2021年1月26日(火)～29日(金)
前期試験

2021年2月2日(火)
後期授業開始

2021年3月23日(火)
第一回入学考査

2021年4月20日(火)～23日(金)
後期伝道実習

2021年6月22日(火)～25日(金)
作業週・卒業カンファレンス

2021年6月25日(金)
第62回卒業式

***新型コロナウイルスの感染拡大状況によっては、変更の可能性があります。**

発行：日本バプテスト聖書神学校

〒389-0111 長野県北佐久郡軽井沢町
大字長倉 4696-27

TEL: 0267-46-4689

FAX: 0267-46-5203

Eメール: jbbf.jbbc@gmail.com

ホームページ: jbbc.jp.org

郵便振替: 00180-1-700102